

射は不明であるが、其の地城の神聖さと象徴するものではないかと言われている。神籠石は高良山だけでなく、西日本各地で見られるものである。

バスは日田市に向つて走る。途中吉井所でブドウ園に立ち寄つてブドウ狩りをしたのも旅の一興であつた。巨峰を口にしてのどをうるおし、自分ではさみ取つたブドウの房を入れた籠を手にして、再びバスに乗る。

初秋の日田、玖珠の里は午後の陽に映えて、あかぬ靴メであつた。万年山(日ぬま)は幾多の歴史を秘めて、旅人の眼を深しませ心を洗つた。水分峠に出て九州横断道路に入る。斜陽にはゆるゆる市院は詩趣豊かである。由布鶴見の麓を廻る長い道にふるさとを御愁を感ずるものは、莖後生れのせいであらうか。

かくして、大分に帰着したのは午後七時であつた。途中で降りた人もあつて車内は少しさびしくなつていたが長い旅の無事を祝ひ、それぞれの収穫は満ち足りた心を抱いて、各々別れを告げた。(おわり)

記録

畑野浦史談会

佐伯市見学を案内して

羽柴弘

去る十月八日、佐伯市内にある史跡や文化財見学の御案内をしたので、おが御土にもこんなになすべし左ものがあつたとき、一般の方々にも知つてほしいので書いてみることにしよう。

標題に畑野浦史談会としたが、実は畑野浦からだけでなく、別物の通り楠本、河内(ごうち)、西野浦、蒲江からも参加者があつたわけで、マイクロバス(蒲江町社会寮)と乗用車(同教育委員会)二台による、同史談会にとつてはまことに画期的な所外見学の催しであつた。

定刻午前北時半、養賢寺の前に私がかつた特快、ちようどバスが着いていて、皆さんそろそろ車から降りていなるところであつた。迎える方は林生所から出かけて来られた伊賀さんと私の父、畑野剛と遼彦の方がおるとのことでははるく待たされた。

養賢寺の門をくぐつて中にはいると、玄関のすぐ前に亭々と高くそびゆるクロカネモ子(一石ソゴと呼ぶ)、枝もたわわに赤い実をへかけている。(去年は間もなくひよどりやに喰いつくされて淋しかつたが、樹勢も旺んで姿が良い。今年はこの美しい姿を未春まで保ち、私たちが眼を深しませてほしいものである。

やがて双方頼がそろつたので、一同打ちつれて本堂におかつて着坐、近藤謙太郎(河内、向原寺の住職)の読経あつて拝礼する。そして内陣に入り彌弥壇近くまで接近して、改めて御本尊釈迦如来外諸仏を拝する。仰ぎ見て慈悲に満ちた御相好と、きらびやかな莊嚴におのずから合掌したい気持ちになる。向つて右側は歴代住職の方々の位牌、左側はこの寺の大檀那である毛利家歴代藩主、並に奥方の位牌と、この形式はどこのお寺でもこの様である。近藤師は丁寧に解説下さる。

ついで近藤師に導かれて位牌堂にまわり、本堂の裏縁を通つて書院に入り、代高泰公、八代高標公の書を拝見する。ここで両史談会の代表者は挨拶を交わし、私から今日の見学コースについて、日程を申し上げた後、一同

は障裡にまわり、広々とした台所也、古色蒼然たる障裡  
大玄閣へこの塔は当らぬかどうかに、さすがは佐伯第一の  
寺であるとうなづく。

次に本堂の裏手にあたる、旧藩主毛利家の墓所に案内  
する。大部分の方がはじめての参拜である。

藩祖高政公の靈廟は別にして、凡てみな堂々たる御影  
石の五輪の塔である。観るものと圧倒するほどの、重量  
感にみちた壮大な塔が三十余基、整然と立ち並んでいる。  
私に仰ぎ見る度に思う。この標に立派なお墓所がどこ  
にあつて、県内にはこれに比肩できるものはまずないが、  
小なりと言えど二万石の大名、豪勢なものである。それ  
は城山々頂の城跡と共に、毛利藩政の勢力の歴史を示す  
もので、いづれも佐伯市へまつ文化哉、史跡の筆頭に奉  
けられるものである。

次に一回は、西南の役の史跡である岡の谷の据磯所に  
向かう。墓地を横切り、松崎の地藏堂の前を経て歩くこ  
と四百米、鉄道線路を踏み切つて仏光上り、杉木立に囲  
まれているのがその墓地である。

明治十年の夏、豊日国境地帯(宇目町墨生峠重岡附近、直川  
村陸地味、蒲江新島原の津島島山、それに宮崎県三川内など)の戦闘で  
戦死した、官軍の將兵並に警視隊合せて百四十八柱の英  
霊が眠っている。墓碑の文字はうすれて読みにくくなつ  
ていて、秋草があたりを生え、わびしい思いに打たれる。  
昔日の樹は殆んど枯れはてているが、樟の大樹が枝を  
張り、戦死者の栄光をたたえた「敵愾の碑」が、その葉  
蔭に高くそびえている。

然し入口の石燈籠は片一方がこわれ、兵卒の墓標は傾  
き、敵愾の碑の玉垣はこわれたまま、招魂所の管理は

よみしくない。これは佐伯市の責任である。  
西南の役は古戦場をもつ佐伯地方には、当時の官軍薩  
軍による内戦の悲劇は、今も尚至る処に語り伝へられて  
いるが、その集約されたものがこの岡の谷である。

一同、深い感銘をうけて墓地を後にした。

さて再び養賢寺前に引き返した一同は、昔ながらの面  
影を止むる山際通りを歩いて三の丸に向かう。武家屋敷  
長屋門、岡木田独歩の下宿先坂本邸、そのあたりの白い  
塀、お蔵跡、井戸。これを自働車が通らねば昔のままの  
たえずまいであるが、何とか出来ぬものか。

三の丸の石垣、黒門はやはり立派である。河野殿が姿  
を消したことはやはり惜しまれるが、文化会館の白い大  
きき運物、刷れたせいか以前のように不調和を感じない  
ようになった。私共はここは外観だけに止めて、城山に  
登ることにした。

較べて登山道とくらぶ、道は悪いが谷間(たがやま)かかつての登  
城の道とえらんだ。昼なお暗い杉や榎の水立の中、藩政  
時代の初期には、家中老職の方々があえおやがら登り下  
りしていた、いまだ歴史の道である。登りつけはそこは  
西の丸である。

西の丸からの展望はまずよい。番匠川が西から東へ、  
大きく曲りくねつて流れ、その旧河道船頭所川は稍越し  
に僅かしか見えない。木立、堅田の谷も見え、番匠  
川の上流地帯、赤丘、直川の山々、弥生町も僅かに一部  
の田園が望めるだけで殆んど山ばかり。すぐ眼下には  
佐伯市のベッドタウンに当る、眺望(たつぱん)、上岡の色とりどりの  
住宅地帯が、生々發展している市勢の一部を見せてい  
る。

西の丸から二の丸、そして本丸へとつづく鶴屋の布置はきれいである。天守朝はもとより櫓土門も今はなく、当時の建物は堀一に残っていない。たゞ殆んど完全に残つてゐるものに石垣がある。

佐伯のシンボルは城山。その城山の生命は実にこの石垣である。特に西の丸から望む二の丸、本丸の石垣の構成美はすばらしい。

しかし、この夥しい石の敷、いったいどこから集めたのか。これにしてこの百四十米の山頂まで運び上げたものが、今かりにこの石垣だけの石を集めて築くとすれば、いくらかかるものであろうか。慶長の初め日田から萩封して来た藩祖高政の力（武カラス経済力）に驚嘆すると共に、かり集められて當々と労役に服した、領内の百姓たちの労苦が憶はれる。築城にまつおるさまざまな物語もあつたろうが、今は石垣にまつおつてゐる秋草の中に、埋まり果ててしまつてゐる。

本丸外曲輪から海に向つての、東南方向の展望はすばらしい。鶴城高校、電報電話局、市役所、警察署と指瀬され、市営球場、佐伯高校とつづき、長島山、野岡山の向こうには、いぢゆる臨海工業地帯で、各種の工場が目白押しに並び、煙突からはまっ黒い煙を吐き、騒音がここまで聞えて来る。

正午をだいぶまわつた。私共は打連れて北の丸から裏道を若宮八幡宮へと下る。途中二つある水の手、雄池と雌池を見ることを忘れなかつた。やはり歴史を志す連中である。誰か賑やかにつづく。下るにつれて大小の石のゴロゴロ道、足許に油断が出来ない。

白濁遺跡では、諸方官司が迎えて下さり、懇切な御説

明がある。貝塚——学術發掘——古代住居跡の発見——堅穴住居の復元建築——異文化財史跡としての指定——その後の維持管理、全く型のように見事に運んだこの姿は、まことにすばらしいもので、諸方官司の推進力には頭が下がる思ひである。

全員そろつて若宮八幡宮の拜殿に上り、諸方官司から修被をうけ、高木、富沢両氏一同を代表して神前に玉串をささげ、そろつて拍手拝礼し、御神酒まで頂いた。身心おのずから引きしまることを賞える。下つて社務所の広間で、お茶を頂きながら和やかな畫食をとる。

食事がつむとそのままの席で、隔意のない懇談の將をもつ。畑野浦の歴史の特殊な姿とも言うべき三つが落人伝承（平氏一塩月一族、菊池氏一富高姓、長曾我部氏一福綱氏）は、今も脈々と生きつゝいることを感ずる。場所によらず、富沢氏の言葉が精れば、両史談会は兄弟関係である。話がよく通じあひ、皆さんからいろいろと発言があり、諸方官司も加わつて賑やかにつづく。

二時半にすつたので懇談会を終わり、午後九日程に入る。先ず上岡取の藪手の丘にそびゆる十三重の塔で、何故かところの人達は「くじんの塔」と呼んでゐる。大分県指定文化財で石造層塔である。佐伯惟治がその子千代鶴の病氣平癒を祈願して建てたとなす伝承は全く當らぬ。建造されてゐる様式から鎌倉末期のものだと推定され、尚委實な塔身の釈迦三尊、老年倒壊復元の節墓壇の中から骨壺に納められた人骨、経商寺が出土してゐるわけで、明らかに當時この附近に勢力を張つてゐたのである。佐伯氏にまつおるもの——と学者は推定してゐる。とはか

くまに之に壯大なすやれた建造物であるが、惜しいこと  
に造立の年号は蘭寇の人の名も、文字はどにも記して  
ない。

塔身及び座根に刻まれている四方仏、軒先の緑の重厚  
さ、基壇の美しい格状間(こうざま)、そして後論であるが  
高くそそり立って秋の陽に光っている相輪、やはり景下  
まねに見える一級品である、これに記録(文字)でもおへた  
ら中世の佐伯氏の歴史もあかり、国指定文化財でない  
である。昔の人の信仰の態度を察することが出来る。

次は弥生町上小倉の磨崖塔、凝灰岩の岩壁をけずって  
刻み出した七基の空塔と二十三基の大小の五輪塔が、又  
ラリと並んでいる壯観、ここは果指定文化財で史跡とな  
っている。臼杵深田のような石仏でなく、又三重内山も  
国東地方に多く見られる造立の空塔や国東塔と異なり、  
自然の岩壁に刻み出した塔(つまり磨崖塔)として、瀬戸内  
全国的にも少ない。又殆んど立体的に刻み出されている  
こと、塔の両股背面に追善(又は逆善)の碑文、嘉慶康永  
など造立年次、「大神惟武」など造立者の名前があること  
など特徴のあるものである。やはり阿蘇凝灰岩に恵まれ  
ている故である。

幸い地元の益田淳氏がこの塔にくわしく、詳細懇切な  
解説があり、又その御厚意による茶菓の接待までいただ  
き、一同感謝した。

尚、磨崖塔すぐ上の横穴古墳群、山王神社の境内の巨  
大な空塔の塔身など、思おぬ見学が出来て満足し方から  
引かえした。

途中番匠の鉄橋の下にある「南無妙法蓮華經」の塔を  
車の中から見ると、藩政の頃の刈形場番匠川原を物語る供  
養塔である。

今日の最後の訪問先は龍護寺である。御森氣入院中の  
若杉吉祥師(本名貞良)は、特に森院の許諾を得て帰られて  
いて、御本尊秘仏十一面觀世音の龕座を甞いて下さった  
が、巨きな厨子は扉を堅くとらしてある。今日の場合こ  
れ以上は望めない。諸方惟深の遺臣山本源太有明が、こ  
こに草庵を営んで主君の菩提を弔った。それがこの寺  
の創建であるので七百数十年の歴史をもつ、当地方では  
第一の古寺である。

歴代佐伯氏の尊敬も厚く、維治が御羊札をすて一夜  
をここにあかし、堅田路から日向へ落ちた物語があり、  
佐伯氏歴代の位牌ももち、尚境内には第十三代佐伯惟貞  
の塔をいた墓もある。即ち佐伯氏の菩提所とされている。  
毛利氏もこの寺を大事にした、本尊を秘仏とし、か  
わってその前立と寄進したのが毛利高慶夫人(宗氏)、楳葉  
に普門品を書写しそれを焼いて灰にし、塑像として納  
めたのがお前立准提觀音であるという。高慶公直筆の獻  
詠和歌も掲げられてある。こゝでも茶菓をいたされた。

寺背の山には西厨三十三ヶ所があり、僅かな爪先上り  
の小径を辿るとすや頂上、ここに登ると城山の背面が望  
まれ、足許すや下と番匠川が流れ展望がすこぶるよい。  
この日は時刻が三十分ほど下つていたので案内はせなん  
だが、陽春四月の中頃この寺の御開帳がある、心ある方  
方の改めての御参拝を希望したい。

柳野浦史談会の方々はよい見学の一日を持つたもので  
ある。佐伯での史跡めぐりとしてはゴールデンコース。  
両会が親睦も更にすすんだ。この次は両会相携えて三重  
竹田の、国東方面にも出かけた。そんな希望が私  
の胸中を去来することしきりであった。